

人と関わること

岐阜市立東長良中学校 3年

佐々木 羽陽(ささき はる)

「私は人と話すことが好きです。」そういう気持ちを抱き人に伝えられる人間はどれだけいるのでしょうか。いろいろな物事が変わりゆく中で生きている私たちは、コミュニケーションの形でさえも変えてしまっていると私は思います。

今、私が生活していて一番楽しいと思える瞬間は人と話しているときです。私は男3人兄弟で昔から、よく言えば話し合い、悪く言えば、口論をすることが多かったのも、きっと人との関わりをととても楽観的に捉えていると思います。

しかし、周りはそんな人ばかりではありません。私とは対照的な、悲観的な悩みもよく耳にします。特に、「私、リア友よりネット友の方が多くんだよね。」という悩みが多いように感じます。

最初にも述べたように、今と昔ではコミュニケーションの形は変化しており、その変化に適応しなければ、人との関わりの悩みは増えていると思います。実際に僕も機械音痴なので、メールなどのコミュニケーションツールには手こずっています。

では、具体的に今と昔では何が違うのでしょうか。ここで、真っ先に考えられるのがインターネットの発達です。インターネットが発達したことで、遠くの人とビデオ通話で話せるようになりました。会ったことのない人とも気楽に話せるようになったり、また声を発さずとも、メールや SNS 等で気持ちを伝えられるようになり、会ったことがない人とも気軽に話すことができるなどの変化があります。

対して、少し前までは、スマホのような電子機器を持っている人が少なかったのも、大事なコミュニケーションをとるときは、ほぼほぼ顔を合わせたり、声を通して直接会話したりしていたと思います。

これはあくまで僕の主観ですが、インターネットが発達したことのメリットは、人と顔を合わせずとも話せるようになったことで、人とコミュニケーションをとる上で、緊張せずに済む社会になったことだと思います。しかしこれは、その「緊張」を避けられるようになってしまったというデメリットとも言えると思います。

話すときに緊張せずに済む社会になったことは、一見するととても楽でデメリットではないように思えますが、発信者の発信する内容が定型になった分、受け手の能力が要求されるようになったことはデメリットではないでしょうか。そもそも、発信者が緊張する原因は、相手の表情や様子から感情を読み取り、それに応じて、文脈や、話し方を変化させる能力を要求されていると無意識に感じるからだだと思います。しかし、相手の表情や、様子の読めない文面上のやり取りだと、発信者は自分の伝えたいことを簡潔に伝えられるのと同時に受け手はこの簡潔な文面から相手の感情等を読み取る能力が要求されています。だからこそ、今僕たちがつけるべき能力はそのときそのときの状況から相手の様子を想像して対応するという、受け手側としての能力だと思います。そして、その能力を培うためには、普段から自分の身の回りにいる人たちに気をかけ、気持ちを察することや字地上的なかわりと少ない人とは、SNS 等のやり取りにおいては、その文面の裏に隠されているものはないかと疑っていくことが大切だと思います。また全部が全部文面上でのコミュニケーションではないというのも事実です。今まで述べた受け手としての能力を培うのと同時に、人と向き合って話すことも心がけて、話し手として緊張に耐えうる能力を手に入れることも大切だと思います。話し手側の能力も、受け手側の能力も並行して培っていかねば、最初に述べたような人との関わりにおける悩みは増えていくと思います。将来的にそれぞれが世に出たときにその悩みは社会に対する大きな障壁になっていくのではないのでしょうか。

今回、変化しているコミュニケーションについて考えましたが、コミュニケーション能力の必要性がわかる面白いデータがあります。それは、「企業が求める人材像」というデータで企業にアンケートを取ったところ、「コミュニケーション能力が高い」という人材像が1位だったことです。また、私自身も、身近にコミュニケーション能力の必要性を感じることがあります。もしかしたら皆さんにも、実感してもらえと思いますが、人と喋るのが上手い人の周りには人が集まっていて、輝いて見える。そう感じたことはありませんか？

私はこの文章を通して、今と昔のコミュニケーションについても述べましたがどちらも否定するつもりはありません。ただ、現代の便利な技術に執着するあまり、人との関わりが薄くなっており、人と話すことが苦手になっている人が多いように感じます。古典的なコミュニケーションと現代の技術を使ったコミュニケーションの両立を全員が行い、誰もが「私は人と話すことが好きです」と言える社会になることを私は願っています。